

種稲 憲太郎氏 (特別養護老人ホーム きしろ荘 施設長)

Kentaro TANEINE, Director, Special Elderly Nursing Home 'Kishiro-so'

○種稲先生

皆さん、どうもこんにちは。私は、神戸市の灘区にあります特別養護老人ホームきしろ荘で施設長をしております種稲と申します。

本日は、特別養護老人ホームにおける動物介在活動についてというテーマでお話をさせていただきます。

本日、お話しさせていただくに当たりまして、施設での活動の状況を写真で準備いたしました。話の内容に沿った写真ではないんですけども、そちらも見ただきながらお話を聞いていただければと思いますので、短い時間ですが、よろしく願いいたします。

まず、きしろ荘の施設について説明させていただきます。

現在、高齢者の方が入所される施設にはさまざまな種類があるんですけども、きしろ荘は特別養護老人ホームという施設で、わかりやすく言いますと認知症のある方、あと寝たきりの方で、日常生活において何らかの援助を必要とされる方が生活されている施設です。現在、きしろ荘には 50 名の方が入所しておられます。きしろ荘は 1979 年 5 月 21 日にオープンした施設で、ことして創立 33 年を迎えようとしています。

続きまして、きしろ荘における動物介在活動について説明させていただきます。

きしろ荘では、動物介在活動のことを動物訪問と呼んでおります。毎月第 3 水曜日が訪問日となっております。この動物訪問が始まったのは、1992 年 7 月からということですので、20 年の長きにわたり継続している活動です。今、写真に写っているのは、その活動のときの様子です。この動物訪問を中心になって進めてくださっているのが、きしろ荘と同じ神戸市灘区にあります、もみの木動物病院の村田香織先生です。約 20 年前に、村田先生が 1 匹の犬を連れて活動を始めたのが最初ということでした。当時はまだ、施設に犬を入れるということについては衛生的によくはないという意見が多くありました。そのため先生は、女性の方が施設長をしている施設が受け入れてくれやすいのではないかとということで、きしろ荘を選ばれたということです。

当時、施設長されていた方が女性であったのはもちろんですけども、その方がユイカというチンの犬を飼わ

れており、毎日一緒に出勤されていたというぐらい動物が好きだったことと、そのとき施設を中心に動かししていた職員も、例えば事故に遭った犬を施設で飼うなど、動物に対してとても理解がある職員が当時勤めていたということで、動物訪問の活動については大きな問題なくスタートしたということを知っております。

きしろ荘で活動が始まったころ、私はまだ勤めてはおりませんでしたが、私が勤めだしてから印象に残っている活動場面を二つほど紹介させていただきます。

ちょっとお写真のほうがないので申しわけないんですけども、まず H さんという女性の方です。この方は子供がおられず、親族との関係もない方でした。私の記憶がちょっと定かじゃない部分もあるんですけども、動物訪問に来られていた犬に子供ができたということで、その H さんがその子供にぺこちゃんという名前をつけてくださったそうです。そのぺこちゃんが訪問にも参加されるようになって、自分が名前をつけたということで、月 1 回の訪問をととても楽しみにされていたということでした。

きしろ荘というのはターミナルケアということで、御本人、あと御家族の御希望があれば、自然な形で最期までお世話させていただくということを方針にしております。その方も御高齢で状態が悪くなられまして、家族の方もおられないので、きしろ荘で最期までお世話させていただくということになりました。

ターミナルの状態になりますと、極力その方が好きだったものを食べていただいたりとか、好きだった音楽を流したりとか、好きだったお花を飾ったり、いろいろそういう最期のかかわりということではしていくんですけども、この方の場合、その一つがお気に入りのぺこちゃんに面会していただくということでした。ですので、月 1 回の訪問日以外でも、状態が悪くなられてからは、そのぺこちゃんと飼い主の方が頻繁に面会に来てくださるようになりました。たしか最後のお葬式のときも来ていただいていたかなというふうには私は記憶しております。身寄りの方がおられない H さんにとっては、そういう自分のためだけに来てくれるぺこちゃん存在というのが、すごく大きかったのではないかとということで印象に残っております。

あともうお一人の方が、Nさんという、これも女性の方です。この方は、ちょっと医学的な言葉で難しいかもしれないんですけど、進行性核上性麻痺という難病をお持ちの方でした。この病気の特徴としては、視野が狭くなって、関節もかたくなって動けなくなるということ。それとあと、飲み込みの能力も低下してきますし、言葉も話せない状態になる。ただ、意識は最後まではっきりとされているという病気です。この方は特に犬が好きだった方ですので、動物訪問にも毎回参加されていました。きしろ荘に入所されたころは何か体も動いて、目の前に犬が来ると、動きにくい体を必死に動かして手を伸ばしているという姿が印象的だったんですけども、進行性の病気ですので徐々に動きにくくなって、最後は寝たきりの状態となりました。

1 ちょっと写真を用意していたつもりだったんですけど、済みません、入ってなくて申しわけないです。ベッドの上でも犬を連れて訪問をしてくださってましたので、この方の場合も1日じゅうベッドの生活で、クラブ活動等にも参加できない状態だったんですけども、動物が好きということで、ベッド上で犬を乗せて参加していただきました。ふだんは腕も、関節かたくなってますから伸び切ってしまうと、排せつ交換するときとか着がえの介護をするときも非常に力が入ってしまって難しい方だったんですけども、ベッド上に小さな犬をお連れして、しばらくしますと体の力が緩んできました。排せつとか更衣するときよりも、本当にほんの少しなんですけども、伸び切った腕を曲げることができるといふ様子が見られました。もちろん我々が排せつ・更衣で介助をするときも安心していただけるように声をかけて、ゆっくり動かして行って、とにかくするんですけども、それでもなかなかかたくなって難しかったのが、やっぱり犬という存在はそれ以上にこの方の緊張を和らげるものであったのかなというふうに思っております。そういう意味で印象に残っている方です。

あとは、こういう動物介在活動を行うことを通しまして、さまざまな施設にとってもいろんな影響があったかと思えます。一つは、先ほどのお話でもあったことなんですけども、さまざまな事情があって施設で生活しなければならなくなった方がいるんですけども、飼っていた動物と別れられなくて、動物と一緒にないと私は施設に行きませんという、そういう方も何人かおられました。そのため、犬とか、あと猫と一緒に入所された方もおられました。もともときしろ荘と一緒に飼っててもいいですよということを言ってるわけではなくて、ちょっと成り行き上そうってしまったという経過は

あるんですけども、そういったことがあったのも、こういう活動をしていたからそういうことが可能になったのかなと思っております。

あと、そうした利用者の方を受け入れることによって、職員間でもこういう動物介在活動に興味を持つようになりまして、施設の学習会のテーマで村田先生に講師をしていただいたことがありました。そのことがきっかけになって、施設に1匹の犬を飼うことになりました。今映ってるのがその犬で、シーズー犬のチャーシューという雄の犬なんですけども、このチャーシューのほうも動物訪問にずっと定期的に来ていましたのでとても人になれていましたし、時間があるときには、利用者さんのおられる食堂とか居室にも私が連れて回っていったりしてたんですけども、そういう意味では利用者の方も、こういうチャーシューとの触れ合いを楽しみにされていました。ただ本人は、利用者の方がお好きというよりは、もっぱら何か物をくれる方とかボランティアの若い女性の方が来たら喜んで寄っていくというところもあったんですけども、そういう形で訪問のほうをさせてもらってました。

このチャーシューも、実は今年の9月に亡くなりまして、職員、あと利用者だけじゃなくて、面会に来られる方とか、あと業者の方なんかも結構皆さんに愛されてましたので、さみしい日々がずっと続いてたんですけども、亡くなって1カ月ほどして、ある利用者の家族の方が、警察に引き取られて行き場のない犬がいるので、チャーシューが亡くなった後にどうしようかということで御紹介をいただきまして、こちらのパグのクロという犬を去年の10月から、また施設のほうで飼うことになりました。このクロは、初め捨てられてたのかどうなのかわからないんですけど、名前がなかったんですけども、利用者さんの方が覚えやすいようにということでクロという名前にしました。

ただ、このクロは、初めはほえないし鳴かないしということでおとなしかったんですけども、最近ではちょっと面会の方が来られたりすると興奮して大きな声で鳴



くようになりましたので、ちょっと今後どうしたものかは先生に相談中というところであるんですけども、せっかく縁があってきしろ荘と一緒に生活するようになりましたので、前のチャーシューと同じように利用者のところに行って、利用者の方の心の安らぎになるようにできたらなと思っております。

それと、これからの動物介在活動についてということです。

以前は、特別養護老人ホームというのは、車いすとかではあるんですけども、まだ認知症がなくてしっかりされた方とかお元気な方も結構おられたんですけども、ここ5年ほどはやはり徐々に重度化の傾向にありまして、きしろ荘でも重度の方が徐々にふえてきておられます。ですので、以前は月1回の訪問を楽しみにとか、自分のお気に入りの動物が来るのを心待ちにされている方もおられたんですけども、ここ数年はちょっとそういうところまでなかなか難しくなしまして、定期的な訪問とか好きな犬を心待ちにするということがちょっと利用者さん自身も難しくなっています。ただ、認知症の方は、記憶の障害はあっても、感情とかそういった部分、感性の部分はしっかりされておりますので、そのときそのときの状況はよくわかっておられるということです、そうしたところを大切に活動に今変わっていったところなんです。

あとそれと、きしろ荘というのは、利用者の方が今まで積み重ねてきた人生というのを大切にしながらお世話させていただくという方針がありますので、入所されたときに、御家族とか御本人さんに、これまでの生活歴というものを可能な限りお聞きするようにしています。その中の項目の一つに、やはりこういう動物訪問を行っていますので、動物を飼われていたことがあるとか動物が好きですかという質問項目があります。そういうところで、動物が好きだった方には動物訪問のほうに毎月参加していただくというような形にしています。月1回の訪問ですし、限られたわずかな時間で、最近はまだ訪問したことも忘れてしまう方が多いんですけども、利用者の方が短い時間でも動物を通して昔のよかった時代のことを思い出して語ることができたり、目の前の動物と穏やかに触れ合うことができることを大切にしながら活動を継続させていきたいと思っております。

最後に、お礼の気持ちにかえてということですけども、動物訪問に来ていただく方を見てとても感心させられることがあります。一つは、やはり直接来てくれる動物なんですけども、やはり認知症が進行した

り、ほとんど言葉での会話が難しくなった方が多いにもかかわらず、本当に来てくださる動物たちが穏やかに利用者の方に接して下さっているんです。飼い主の方の愛情を日々しっかり受けているということももちろんあるかと思うんですけど、本当に言葉は通じないですけども、感情の部分で利用者の方とつながっているんだなということを感じたりします。

あともう一つは、飼い主の方自身が、やはり利用者の方への声のかけ方とかかかわり方がとても上手であるということです。特に介護の仕事でも、やはりコミュニケーションというのが非常に大切なことなんですけども、つい我々は言葉だけにとらわれてしまって、その方を理解しようとしがちなんですけども、やはり言葉にならない部分ということをやっぱり酌み取るというのが、私たちの介護の仕事でもすごく大事なことなんですけども、そうしたことが、やはり訪問に来られる方はふだん自分の飼っている動物を相手にされているということ、もちろん動物も言葉は通じないですけども、やっぱり思いとか感性の部分がすごく通じる部分があって、そういうところでも飼い主の方がすごく上手に利用者の方とかかわって下さっているところがあるんです。

本当に重度の方が多くなってしまって、本当に短い時間でという形にはなっていますが、利用者の方が短い時間でも昔を思い出したり楽しんでいただけるというような貴重な時間を、飼い主もそうですし、来てくださる動物、犬とか猫もそうですけども、その方とともに職員がやっぱりそういう時間を共有できることに感謝しつつ、本日のお話とさせていただきます。どうもありがとうございました。

○戸塚座長

どうもありがとうございました。

それでは御質問がございましたら、どうぞ手を挙げてください。

それでは、アドバイザーの先生、一言お願いいたします。

○レベッカ・ジョンソン

そうですね、これも水曜日だったと思います。ジェットラグがまだありますので、ちょっと時間が違うかもしれませんが、水曜日に私、講演にも訪れる機会がありまして、非常に感銘を受けました。人々、婦人が犬を連れてらっしゃったんですね。10匹ぐらいいましたか。いい数ですね。非常に感銘を受けました。非常に洗練されておりました。人々との触れ合い、そしてドッグオーナーとの触れ合い、すばらしかったです。専門

家がいらっちゃったと思いますよ、この訪問の裏側には。完璧な状態でした。人との触れ合いの方、認知症の方もいらっちゃったかとも思いますけれども、すばらしい触れ合いをなさっていたと思いますよ。非常に満足した形だったと思います。楽しみ、そして涙もあったかだと思います。入居していらっしゃる方、非常に心が動いたと思いますね。非常に感動的なシーンでしたね。高齢者の方は反応していました。動物が訪れると泣いていたんですね、これは大事だと思いますよ。いろいろな形で反応するという、泣いて反応するという、犬あるいは動物を見て痛みを感じているわけじゃないんですね。何かの記憶を刺激しているということだと思えます。だから泣いていらっちゃったんだと思います。そして、悲しかったんだと思います。楽しみを感じていらっしゃる方もいらっしゃいましたし、涙、こういったシーンもありました。でも、すばらしい経験でした。

犬は完璧でした。もう本当に信じられないぐらい完璧でしたよ。私の犬はどうか、テストに受からないかもしれません。私の犬もデルタ協会のペットパートナーになりたいんですけども、テストを受けたんですが、非常に私神経質になっておりまして、そしてそれがリードを伝わって私のペットも神経質になってしまいました、チーズが床にあったんですけども、まあ受かったかな、行き過ぎちゃったかな。それを行き過ぎてから彼女が取ってしまったんですね。だから、試験に受からなかったんです、私の犬。すばらしい専門家の方が、そのプログラムではいらっちゃったと思いますよ。

○種稲先生

本当に20年ほどの活動になるんですけど、本当にそういうことでは全く事故だったりとかそういうこともなく、本当にいつもいい状態で村田先生のほうも活動を続けてくださってますので、これからもよろしく願いいたします。

あと、済みません、私、レベッカ先生のことを余り詳しく知らなかったもので、先日も何もわからない、しかも英語もしゃべれませんので、何も言えなかったんですけど、最後に施設のことを非常に、においのない施設というふうに言っていて、特にふだんから我々が一番気にしてることでしたので、本当にそれを言っていたいたときはうれしかったです。そのときも済みません、英語でしゃべれないものでお礼が言えなかったんですけど、きょうは通訳の方もおられますので、どうも本当にありがとうございました。

○レベッカ・ジョンソン

ありがとうございました。

○戸塚座長

柴内先生。

○柴内先生

本当に古いチームだと思いますし、村田先生というすばらしい行動学の先生がついていらっしゃるチームですから、今回もちょうどレベッカ先生がおいでになって、神戸で2日ばかりの日にちがあって、そのときにどこかを、CAPPを見ていただこうと思いましたが、ちょうど何とかきしろ荘のほうで活動を見ていただく機会があって、こんなにお褒めをいただいて、きしろ荘にも、それからまた村田先生のチームにも本当に心から感謝を申し上げます。大切なことだと思います。ありがとうございました。

○戸塚座長

それでは、どうもありがとうございました。

それでは、続きましてAATに関する発表ということで、動物介在療法に関する発表、東京都清瀬市にございます信愛病院の作業療法士、福田美穂様に御発表いただきます。よろしく申し上げます。